

「震災の痛みを和らげてあげたい」と伊豆視覚障害者支援センターの皆さん。



温 久しぶりの温かい食卓、温かいご飯。そして仲居さんの温もり。震災直後は、おにぎり一つだけだったという参加者は、1日3食食べられる環境に幸せを感じたそうです。

癒 「自分たちにも何か支援ができないか」との思いを胸に、市民ボランティアの皆さんが自分のできる支援を実施。参加者は、フラワーセラピーに、マッサージに癒されました。



フラワーセラピー研究会の皆さんによる教室。心のケアを行いました。



情 伊豆の国市友好都市交流協会、伊豆の国市音頭保存会の皆さんとの交流。狩野川台風の境遇と重ね合わせ、手を取り合って涙する人も。一緒に歌い、笑い、そして泣き、友情を育みました。



参加者の声(アンケートより)

- ◆被災をしたことさえ忘れてしまうほど、すつごく楽しい日々でした。伊豆の国市の皆さんの温かいおもてなしを受け、本当に心身ともに癒されました。(45歳女性)
- ◆余震から逃れ、津波のことを一時、忘れることができました。伊豆の国市に来て、まちの花々にも癒されました。津波の来た場所は、枯れた木とガレキ、ホコリ、ニオイ。そこからも逃れられた。(62歳男性)
- ◆人の優しさ、温かさ、思いやり。今まで自分の中で忘れていたこと、大事なことを思い出させてもらいました。(42歳女性)
- ◆一ヶ月半もお風呂にも入れなかった。日本でも有名な温泉に入り、地震の怖さも一時的にせよ忘れることができ、ゆつくり眠ることができました。(74歳女性)
- ◆宮城の人よりも人情深い人が多いと思う。(44歳男性)

次ページへ続く



多賀城市震災被災者宿泊場所提供事業報告

お別れの日。参加者にとって、旅館の仲居さんは忘れられない存在に。お互いが手を取り合って涙、涙、涙。

多賀城市震災被災者受入実績

	日程	人数	宿泊先
第1便	5月1日～11日	19	三溪園
第2便	5月12日～22日	18	三楽荘
第3便	6月7日～12日	24	姫の湯荘
第4便	6月13日～18日	23	あづまや旅館
第5便	6月19日～24日	31	糸びすや旅館
第6便	6月25日～30日	38	華の湯
		36	三溪園
合計		189人	

2カ月間で延べ189人を受け入れ
この事業は伊豆の国市が、災害協定を結ぶ宮城県多賀城市の市民を対象に、伊豆長岡温泉への参加者の送迎、宿泊先の提供、健康相談などを行い、参加者が心身ともに療養してもらうことを目的に実施しました。滞在中は、市民ボランティアによる市内の観光案内、友好都市交流協会・音頭保存会との交流、フラワーセラピー教室やマッサージなどを行いました。
事業は、5月1日から6月30日までの2カ月間にわたり、10泊11日を2回、5泊6日を4回実施し、延べ189人を受け入れました。

多賀城市の被害状況

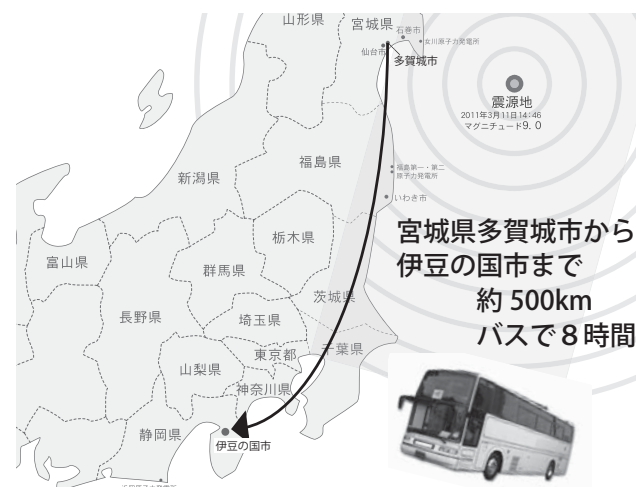
市内の震度 3月11日14時46分 5弱
14時47分 5強
4月7日23時32分 5強

津波の高さ 約2～4m (仙台港：約7m)

浸水面積 約662ha (市域の約33.7%)

人的被害 (6月15日現在)
市内での死者数 187人
多賀城市民 121人
※市外で亡くなられた人も含む
行方不明者 3人

避難者数 (7月14日現在)
262人
※多賀城市ホームページより



伊豆の国市を歩く

ボランティアガイドの案内による市内観光。世界遺産登録を目指す韮山反射炉などを見学しました。



韮山反射炉(上)と江川邸(下)



伊豆の国市を食べる

市の特産品『イチゴ』。口いっぱい頬張りました。



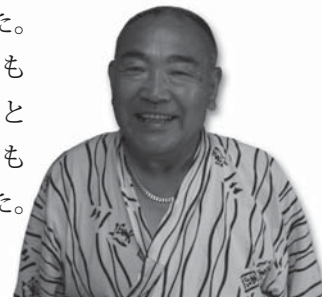
家族でまちを歩いていたら、見ず知らずの私たちに中学生があいさつをしてくれました。伊豆の国市のみんなが温かい人だと感じました。ここでゆっくりすることができ、子どもたちもリラックスできたみたいです。

(多賀城市 庄司さん家族)



皆さんが、本当に気持ち良く迎えてくれた。私たちのために、こんなにも素晴らしいおもてなしをしてくれた。こんなにも嬉しいことはないよ。パワーをもらった。「被災地でもう一回やってやろう」という気持ちになった。

(多賀城市 千葉昭蔵さん)



多賀城市では余震で体がずっと揺れている感じだったけど、伊豆の国市で温泉に浸かって癒された思い。今まで知らなかった静岡県のこのまちを、とても近くに感じるようになりました。

(多賀城市 牧口さん夫妻)



こんなおもてなしを受けるとは、伊豆の国市に来るまでは、本当に思っていなかった。市長さんともお話しできたし、滞在中に写真をたくさん撮ったので、帰ったら、この体験をみんなに伝えたい。

(多賀城市 高橋眞二さん)



◆多賀城を離れ、いろいろ考えることもできて良かったです。これから復興に頑張りたいと思います。(67歳男性)

◆みなさんに良くしていただき勇氣と希望を持って我が家に帰れます。(73歳女性)

◆帰りましたら復旧、復興に向けて努力してまいります。そして一日も早く新生多賀城をお目にかけたいと思っています。(73歳男性)

◆心も体もリラックスしました。これから一歩一歩前に進んでまいります。(64歳女性)

◆伊豆の国市での6日間は私の一生の宝物です。(57歳女性)

◆人の情けが嬉しくて、皆が心配してくれました。私たちもしっかりガンバローと心にきめ、皆様に1日も早く恩がえしをしたいと思っています。(68歳男性)

この他にも多くのお礼の声が届いています。

今回の事業実施にあたっては、市民ボランティアをはじめ多くの皆さんからご理解・ご協力をいただき、本当にありがとうございました。

東日本大震災発生から4カ月以上が経ちました。

この大震災で肉親を失った人たちは、今も癒えることのない悲しみに涙しています。死者は15,592人、行方不明者は5,070人にのぼります(7月19日警察庁報告)。そして今でも避難生活を送っている人たちは9〜10万人とも言われています。

たとえ時間が経過しても、私たちは、震災の脅威や、『被災地のために』という熱意を決して忘れてはいけません。この震災を忘れないためにも、被災地への継続的な支援していきましょう。



写真は、震災から3カ月が経過した宮城県のある町の様子です。

これらも、私たちにできる支援

◎被災地への義援金

受付場所

・市役所各庁舎(伊豆長岡・韮山・大仁)
・市社会福祉協議会各支所(伊豆長岡・韮山・大仁)

受付期間 9月30日(金)まで

問合せ 伊豆の国市社会福祉協議会

◎節電

(今月のカレンダー裏を参照)

震災以降、市民の皆さんからいただいた『自分にできる支援』を一部紹介します。

- 私にも何かできることはないか考え、募金や節電、節水を心がけています。(北江間・27歳・女性ほか)
- 現地に行くこともできませんので、義援金だけでもお届けしました。(立花台・69歳・男性)

- 私たちにできることは継続的な支援として義援金を送ることもそうですが、日本経済を回していくことも必要だと思います。(立花・61歳・女性)

- 節電のために『緑のカーテン』を作ることになりました。私にできること、これから1つずつ増やしていきたいです。(南江間・22歳・女性)

- 被災地方面の野菜を買って食べました。とてもおいしかったです。(中條・62歳・女性)
- 被災地の皆さまの健康を祈ることしかできません。(四日町・74歳・女性)